

【事例報告】

東京都立八王子北高等学校「服のちからプロジェクト」 東京都立八王子北高等学校教諭 土方 敏行氏

司会 それでは「事例報告」の最後になります。東京都立八王子北高等学校の「服のちからプロジェクト」について、八王子北高等学校の土方敏行先生よりご報告いただきます。土方敏行先生、よろしくお願いたします。

土方 こんにちは。八王子北高校の土方と申します。昨日からちょっと大きな声を出す仕事をしていまして、声が少し枯れています。お聞き苦しいと思いますが、よろしくお願いたします。

はじめに、実は今日、共通のテーマが「サービスマーケティング」ということですね。ですが、私がこれからご紹介する内容は、たぶんそれには当てはまるとはいえないのではないかと感じておりますが、教科「奉仕」の取り組みの一例としてお役に立てればと思います。よろしくお願いたします。

八王子北高校について

タイトルが上にあるのですが、「八王子北高校、服のちからプロジェクト」というものです。私どもの学校は、今、写真がありました、このような感じです。私、14年おりました、ものすごく愛着を感じて大好きなのですが、実は今はもうこの姿はなくて、この4月から大規模改修が始まりまして、私も生徒もいま仮設のプレハブの仮住まいになっています。今日は発表をさせていただくということで、せっくなので思い入れのあった校舎の最後の写真、これは冬の朝、たぶん6時ぐらいに撮った写真だと思うのですが、それを使わせていただきました。

八王子市というのは、ご存じのとおり、東京の一番はずれにあります。八王子北高校は東京ではおそらくいまだに地域と言いますか、ムラ社会がかろうじて残っているところに存在する珍しい、希少な都立高校ではないかと思います。ほとんどの生徒が自転車で通ってきます。5×3の15クラス、生徒数は600名ぐらいで、自転車置き場は500台以上入るのですが、常に溢れているという状況です。地域から通っている生徒が多いという意味では、地域とのつながりはかなり深いかなと思います。

「奉仕」について

そのような中での「奉仕」なのですが、私どもの学校は、実はA、B、二つ授業計画がありまして、まず一つめが基本的な「奉仕」の内容です。それをやるか、もしくは独自のプランBをやるかは学年の判断に任されています。今回は、せっくなので何かちょっと大きめなことをやりたいと思いました。地域の方はもちろんなのですが、とにかく生徒たちは八王子のこの隅っこの方からあまり外に出ません。ですから極力、いろいろな外部の大人の方や、あるいは大学生の方、そういう方々と少しでも多く実際にふれあうチャンス、お話を伺うチャンスを作りたい。その中で何かものすごく満足できるような結果が残せるようなことはないかなというようなことを学年スタート前の2、3月の頃に考えていました。

服のちからプロジェクトのきっかけ

そんなときに、昨年度まで私どもの副校長で奉仕研究会の久保先生が「土方さん、このようなものがあるよ。やりたいでしょう」と1枚のチラシをお示しくささいました。それを見ましたら、わかりやすくいえばユニクロとUNHCR、国連の難民高等弁務官事務所さんの力を借りて、難民の

皆さんに洋服を送ろうというプロジェクトだったのです。

できるならば、それを私どもの後期の「奉仕」のテーマとしてやりたいと思い、早手を挙げさせていただきました。たくさん学校から手が挙がったようなのですが、ほとんどの学校が「文化祭でやりたい」、「部活動でやりたい」、「委員会でやりたい」ということで、「学年としてやりたい」という学校はおそらくなかったのだらうと思います。本当は審査があったのだらうと思いますが、実施時期が他校とずれており、「文化祭より後にやりたい」と希望したのはうちの学校だけだったのです。

ですから、ユニクロ側からは、最初から「やれますよ」という内々のお話をいただいていた。しかし、1年生もまだ入学してきていませんでしたので、実際にどのようなことをやろうかということについては、漠然としか考えていませんでした。幸い、普段から町内会の皆さんとか、近隣の老人ホームや病院とか、あるいは小中学校などとの交流がいっぱいあったものでしたから、そういうところと連携できればな、などと考えていました。

それから何だかんだと言っているうちにどんどん時間が進んでいきまして、当然、1年生も入学してきました。はじめに、生徒には「1年間の奉仕ということで、難民支援（キャンプへの衣服寄贈）も含めて、いろいろなことをやりますよ」という内容のガイダンスを行いました。そして、1学期は地域清掃やさまざまな「奉仕」のあり方について学ぶことを基本としました。

洋服を回収する対象先を選ぶときの問題を解決

2学期に入り、どのようにそれらを難民支援に活かしていくかという、生徒とのキャッチボールの中で、「きっと難民の中に子どもがいっぱいいるのではないか。どうせやるなら、子ども服を集めたい」という話になり、先ほどの元副校長の久保先生のお力もいただきながら、近隣の小中学校に声をかけようということになりました。

ところが、生徒が「中学校」を対象に含めることに難色を示しました。なぜかというと、年が過ぎてやりにくいというわけです。訪問すると、ついこの間まで同じ学校で過ごしていた後輩がおり「その子たちの前でプレゼンするのはちょっと・・・」ということでした。そこで、中学校はやめて、今回は小学校に絞って実施することにしました。

次に課題となったのは、「どこの小学校に協力を依頼するか」ということでした。八王子北高校の隣には松枝小学校という本当に仲良くさせていただいている小学校があり、また5分ぐらい歩いたところには陶鎔小学校という、ちょっと難しい字を書く小学校もあります。さらに、八王子北高校は檜原という地区にありますので、檜原小学校であるとか、近隣の川口地区には川口小学校もあります。ということで、結局は周辺の小学校全てにお願いをしてみました。その結果、最終的に四つの小学校が受け入れてくださることになりました。

実は、八王子北高校は5クラスありますので、できれば1クラスで小学校1校を担当したいということになりました。幸い、隣接している松枝小学校が「うちは1年から6年までの全クラスいいですよ」とおっしゃってくださいましたので、低学年グループと高学年グループの2グループに分けて2クラスが受け持つことになりました。他の小学校3校は「できれば高学年で」ということでしたので、各校1クラスが受け持つことになり、早速くじ引きで炭鋳小学校を決め、取り組みに入りました。

ユニクロの服のチカラプロジェクトを「八王子北高校、服のちからプロジェクト」に

内容は簡単です。この辺りはレジユメに綴じ込まれていますので、後ほどご覧いただければと思います。実はユニクロが「服のチカラ」という取り組みをやっています。ユニクロの「全商品リサイクル活動」というのがありまして、私たちはその取り組みに乗ったわけですが、ただし、ユニクロがやっているほうにつきましては、当然ですが、ユニクロの製品に限りますが、私どものように学校の場合は、それに制限は設けないということで、「どこの会社のものでいいですよ」というお許しいただくことができました。

ところが、活動を始めるのに際して、校内的に「特定の企業の宣伝に使われるのはけしからん」という声も多かったため、このプロジェクトのタイトルを「八王子北高校、服のちからプロジェクト」にすることにしました。

そもそも「難民」とはどのような人たちなのか、それすらよくわかっていない生徒も多かったため、まずは衣服寄贈の仲介役となっているUNHCRから、一人ご担当の方がお見えくださるということになりました。ところが、直前になって、その方が海外に派遣されてしまうということがありまして、一旦この取り組みは流れてしまいました。しかし、教育庁でご担当されている増田さんにご尽力いただきまして、J-FUNユースという、UNHCRを支えている大学生ボランティアの団体から、嬉しいことに5名の学生さんがサポートに来てくれることになりました。そして、1クラスに1名ずつ付いてくだって難民に関する特別授業をしてくださいました。

これは最初のオリエンテーションのときの写真です。まずはここから始まりました。「バルタン聖人が来たらどうする？『ここに住まわせてくれる？』と言ったら、みんなどうする？」というところから始まり、これをきっかけに後はその5名の学生がそれぞれのクラスに難民のことについて話をしてくださり、生徒とさまざまなキャッチボールをしてくださいました。

具体的な手順について

それからいよいよ具体的に、「それでは、どのようなことを、どのようにするのか」という手順について、ここに書かれているものが大体後半の計画なのですが、詳細は後ほどご覧ください。本プロジェクトには、大体30時間ぐらい使いました。少し前後して申し訳ないのですが、これが小学校の保護者の方に配ったプリントです。これがユニクロのほうから指定のあった内容です。

簡単に言えば、「洋服を分けてください。まず大人用ですか？子ども用ですか？春物ですか？夏物ですか？男性用ですか？女性用ですか？」。そして、春夏・秋冬、まずこれを大きく二つに分けます。さらに男性・女性に分けます。次にトップス、ボトムス、上ですか？下ですか？こんな感じで衣服を分類しました。

更に、子ども用は子ども用だけで分けるのですが、これを小学校の児童に話さなければいけないので、如何に上手に伝えることができるか、生徒はかなり苦戦しました。まずはポスターをつくり、どのようなプレゼンをするか。小学校から与えられた時間は実は5分しかありません。その5分間でどうやって分かってもらおうかということで、それぞれ知恵を絞りました。もちろん私のほうでは、保護者の方の後ろ楯が当然必須ということで、保護者向けの案内を出させていただきました。しかし、生徒は自分たちと児童との間で極力やりとりを成立させたいということで、それぞれ工夫を凝らして頑張ってくれました。

次に、感想文です。資料は感想文で終わっているのですがちょっと良くないかなと思いながら原田先

生のお話を伺っていたのですが、実は続きがありまして、「この活動を2年生になってもやりたいね」とか、「リベンジしたい」と生徒が言っていたので、本当は今年私がやりたかったのですが、私が校内の事情で学年主任を外れ、今は生活指導担当になってしまいました。

それと、東京都の事業自体が変わってしまいました。類似のものを継続しているのですが、それについては今年の新1年生が「ぜひやりたい」ということで話が盛り上がっています。本当は、2年生の普通の「総合的な学習の時間」としてリベンジしたかったのですが、残念ながらそれは叶いませんでした。

では、今後どうするかということで、2年生は「自分たちが『あそこもここも、あれもこれもこういうふうにして、こうすれば良かった』と思うことを下の1年生に伝えようか」という話が今出ています。これがうまくいくといいかなと思っています。

どのような準備をしたか

では、どのような準備をしたか。「まず小学生の子どもたちの注意を引かなければいけない。特に低学年はどうするか」と低学年を引き受けたクラスはものすごく悩んでいました。いろいろなポスターをつくり、なかには紙芝居、それから着ぐるみまでとはいかないのですが、頭に何かかぶりものをして「難民というのはこういう人たちだよ」ということを説明するなど、さまざまな工夫がみられました。

この写真も同じです。見てお分かりかもしれませんが、やはりこちらもそうですね、女子生徒のほうがモチベーションが高いと言いますか、やる気満々で、男子はちょっと今ひとつついていけないという、当初はそのような感じがありました。大体女の子がキャッキョ、キャッキョ「こうしよう、ああしよう」と言いながら、男の子に「あなたは、これして」と言うパターンです。これも女の子しか写っていませんね。この左側の黄色い大きいものは、実は小学校に行って、クラス訪問してプレゼンをして、その後、「それでは、いつからいつまでに洋服を持ってきてね。その持ってきた洋服はここにに入れてくださいね」と示した回収ボックスです。

これも同じような回収ボックスです。この黒いのも回収ボックスで、左側がたぶんポスターか紙芝居の最初のページだと思います。

小学校での説明の様子

これが12月20日、寒かったのですが、朝一番に出かけるクラスです。同じ日に近隣の四つの小学校で同じ時間を頂戴するということはできませんでした。ある小学校は「それでは、朝一番の学活の時間に来てください」、ある小学校は「お昼休みの終わった給食の後の、次の授業のスタートの5分間だけお願いします」という感じだったのです。これはたまたま私が担当した自分のクラスなのですが、僕が一人で行けば5分で行ける陶鎔小学校ですが、生徒と行くとぞろぞろと歩くので10分ぐらいになります。そこにこのような大荷物を持っていきました。この写真にある感じですが、ちなみに数少ない男の子で右側の子は野球部の子で、この子がこのプロジェクトの生徒側の実行委員長です。本当に一生懸命やってくれました。

八王子の小学校は学年のクラスの基本が2学級です。3学級のところもありますが。ですから、一つの小学校の4、5、6年生がそれぞれ2クラスで計6クラス。そこで本校は1クラス40人を大体6班ぐらいに分けて、1チーム6、7人のチームを作り、それぞれのクラスを責任もって説明するということにしました。

この写真もそうですね。これはおそらく難民の写真を見せていろいろな説明をしているところです。本当はこの小学校は4、5、6年生だけが対象で、その分しか回収ボックスを用意していなかったのですが、この真ん中の女の子の説明があまりにうまくて、当日、校長先生がその説明している姿をご覧になられて、突然「全学年にやって欲しい」ということになりました。予定になかった1年生から3年生までのクラスを校長先生自ら案内していただきまして、突然クラスに来られた先生はたぶん迷惑だったと思うのですが、結果的には「ものすごく嬉しかった」と高校生たちたちは言っていました。

この写真もそうですね。これは習字か何かの時間の冒頭です。先ほども申し上げたのですが、最初は照れくさいし、嫌だなど。特に男の子ですね。半分ぐらいは「うまくいくのかな」と、なかなか自信を持てずに行ったのですが、わずか5分なのですが、いざ、やってみたら、小学生がものすごく真剣に見てくれて、その後、質問の手がどんどん挙がります。「ハイ」、「ハイ」、「ハイッ」と質問もたくさん出ます。生徒は、これにびっくりしてしまったようで、ものすごく嬉しかったのでしょね。その後、「説明の仕方をリベンジしたい」と言っていました。最初にも申し上げたのですが、このような生徒たちから声がたくさん出ました。それで、先ほどの話につながるわけです。「今年、至らなかったところを来年、是非、もっとうまくやろうよ」と。本当はそのまま行ければ良かったのですが、結果的には残念なことになりました。

これは、実際に回収ボックスを置いている様子です。これはある小学校の昇降口に置かせていただいています。学校によっては「クラスに置いてください」という学校と、「うちはプレゼンテーションは4、5、6年生だけでいいが、回収自体の対象は全校でお願いします」。つまり、「1、2、3年生の分も作ってきてください」という学校もありました。

最終的には、四つの小学校全部が「下級生の低学年の子たちも是非回収活動の対象に入れて欲しい」ということで、回収ボックスをたくさん用意しました。一番右下に「ユニクロ」という文字が入れてありまして、これがユニクロに対するせめてもお詫びと言うか、生徒が「やっぱりユニクロの名前を少しぐらいは入れなければいけないよね」ということで、あえて「ユニクロ」と入れたものを持って行きました。

地域の協力

そういう中で、新聞が記事として紹介していただきました。その結果、保護者以外にも、新聞をご覧になられた近隣の八王子市内の有志の方、それから複数の保育所、老人施設、老人ホームの方々もたくさん持ってきていただきました。特に保育所はバザーの残り品をいっぱいいただきました。これ、ものすごく助かりました。「300キロぐらい集まればいいね」という目標でやったのですが、結果的にはそれを大きく超えて1トン400キロ近くまで行きまして、とうてい1回では送りがれず、佐川急便に何度も来ていただきました。1回は、来て荷物を見て「今日は無理」って断られてしまったこともありました。写真にあるのが結果です。後ほどご覧ください。

回収ボックスを回収、整理、発送の様子

これは、小学校に回収に行ったときの写真です。あまりの量に、女の子も、ひいひい言いながら運んでいました。これもそうですね。これは、一つの小学校の全クラスから衣類の入った回収ボックスを回収して外に出したときのものです。「さあ、どうやって持っていこうか・・・」。リヤカーもないので担いでいくのですが、「ここはさすがに男子の出番だね」ということで、特に男子生徒が頑張りました。このように手にたくさん抱えて持ちかえりました。

本校は、どちらかというとやんちゃ君も結構多い学校なのですが、やんちゃ君たちが小学生の子どもたちから「お兄ちゃん」「お兄ちゃん」などと手などを触られて、とっても喜んでいました。はじめは嫌がっていたのに、ニコニコ顔で荷物運びをしてくれました。

これは、本校が仮設校舎への引っ越しのちょうど直前だったものですから、回収ボックスの置き場所に困り、体育館のマットとか跳び箱などを置いてあるところを無理やり空けて、そこにとりあえず納めたときの写真です。次の写真は、北高の校内収集用回収ボックスです。

この写真は200人全員で体育館の床に集めた衣服全部を撒いて、春物だ・夏物だ、ボトムスだ・トップスだ、男物だ・女物だ、あるいはキッズだ・赤ちゃんだ・ベビーだとかという仕分けをしているところです。そして、次の写真は、「きれいに畳んで、もらった人が嫌だなど思うものは除こうね」ということで、例えば大変申し訳ないのですが、折角いただいても、実は犬の毛がいっぱい付いているとか、大量にシミが付いていたり、破れていたり、すり切れていたりして「ちょっとこれは」というものがどうしても含まれています。それを選別しているところです。それを、この写真のような感じにします。「女性、春夏、トップス」と書いてありますが、このような仕分け方をして梱包しました。この写真は、分かれて、そろそろパッキングですね。パッケージというか、蓋をしましょうというところです。

国内での洋服の行き先

この写真のような感じで、みんなで仕分け表を貼ってガムテープで閉じ、これを運送会社を持って行っていただきました。都合4回ぐらい持って行っていただいたのですが、行き先はどこかという、たぶんコートジボアール難民キャンプだと思います。支援対象の洋服は、実は150キロぐらいの圧縮した塊にして、途中、相手国で盗まれないような対策をします。ですから段ボールで送るのではないのですね。圧縮して大きな塊にして、人が一人二人では担げないような形にします。そうしないと、途中でどうも搾取されてしまうようです。そういうことも生徒に全部説明し、このようにして回収しました。

支援品になるものは横浜の指定された会社を送りました。そうでないもの、つまり、これは送れないなというものについては、どういうふうに使われるかわからないのですが、全部いわゆるリサイクル品として静岡県のほうにお送りしました。最後の写真は、校内の掲示板です。全部で1,300キロぐらいになったのですが、「みんな、ありがとう」という報告の内容です。

以上で私の説明は終わりです。「このような一つの取り組みがありました」ということでご報告させていただきました。ご静聴有難うございました（拍手）。

司会 土方先生、ありがとうございました。改めて感謝の拍手をお願いいたします（拍手）。